

星槎大学機関リポジトリ

論文種別	研究論文
タイトル	在日外国人支援における宗教組織の貢献
Title	Contributions of religious organizations that support foreign residents in Japan
著者	高橋 泉
Author(s)	TAKAHASHI, Izumi
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol.3
号	No.2
ページ	pp.17-32
発行日	March-28-2022
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000281/

研究論文

在日外国人支援における宗教組織の貢献

高橋 泉^a

(星槎大学大学院教育学研究科)

要旨

日本における外国人支援は、自治体や国、行政の外郭団体、NPO、ボランティア団体などによって多様に展開されてきた。そうした状況のなかで、移民・難民等を含めた在日外国人支援を古くから行ってきた団体が、キリスト教、仏教などの宗教組織である。これらの宗教組織は、行政が支援に乗り出すよりもずっと以前から積極的に支援に取り組んできた歴史的背景を持つ。したがって、宗教組織は在日外国人問題を語る上で見落とすことのできない存在である。それにもかかわらず、これまで十分に注目されてきたとは言い難い。

本論文では、このような宗教組織が在日外国人支援にどのように貢献してきたかについて明らかにすることを目的とする。そのための方法として、主にキリスト教系組織を中心として宗教性と利他的行動の関連、在日外国人支援に見られる宗教組織・団体の利他的行動に向けた動機と行動を先行研究から検討した。その結果、宗教組織の利他的行動に向けた動機と行動からは、単なる衣食住の支援だけにとどまらない、異国で暮らす在日外国人に対してより深く寄り添った支援の実態が明らかにされた。この結果は、宗教組織が異国における外国人に対し宗教・精神面でのケアを提供することができる集団という点でその存在に大きな意義があることを示している。さらに、これらの支援は他の組織には担うことのできない役割であるという点で、宗教組織が信仰をアイデンティティとすることの多い外国人にとって重要であることが明らかになった。そして、これらの支援に対する利他の役割は、信者の信仰を礎にした利他の心を動機とする宗教組織が行う支援そのものである。

キーワード：在日外国人支援 宗教組織 利他主義 宗教性 ボランティア

1. 序論

1) 在日外国人支援における宗教組織の貢献

出入国在留管理庁によれば¹、日本における在日外国人²は2018年には263万人・195国籍（無国籍を除く。以下同）、2019年には293万人・195国籍、2020年には288万人・196

2022年3月18日受理

a 星槎大学院教育学研究科博士後期課程

国籍と、多種多様な民族と外国籍を持つ人々が増加してきた。かれらに対する支援は、行政、NPOなどの民間団体、個人ボランティアなどにより、多様性を持つ在日外国人の必要に応じて様々な試みが展開されてきた。また多くの先行研究において事例研究などを含めその実態に関する検討が行われてきた(小泉, 2019; 高橋, 2014 など)。

支援組織としては、国や自治体などの行政組織や非営利活動法人などの民間団体があるが、歴史上大きな役割を果たしてきたのは宗教組織である。しかし宗教組織による支援についてはこれまであまり注目されてこなかった。その理由としてはおそらく、行政組織などと比較すると宗教組織は在日外国人に対する支援を行うべき組織として義務付けられた組織ではないことや、活動の記録が残っていない場合が想定される、といったことがある。

しかしながら、世界各国の難民・移民支援における宗教組織の役割は、山本(1992)、飯野(2002)らが示すように多様な支援を展開し、人々が集う生活の拠点・外国人コミュニティとしての結節点を提供していることである。日本でも同様に、これまでの日本における難民・移民支援や在日外国人コミュニティとしての宗教組織の役割は、単なる衣食住の支援だけにとどまらず、在日外国人の宗教的アイデンティティの保持や、礼拝実践、信仰の養いなどの、宗教・精神的な面での支援が行われている点で重要である。このような支援は国や行政などが担うことは難しく、この役割を果たすことができる組織・集団として、改めて宗教組織の貢献やその存在意義について検討する必要があるだろう。加えて、宗教組織ではないが、宗教思想の影響を受けた「非教団」³として、在日外国人支援に携わった人々の存在も見落とすことができない。これらの組織・集団については、まずそこにある宗教性⁴や精神性に着目することで、各組織・集団の在日外国人支援についてより深い視点での存在意義・価値を探ることが可能となろう。

2)目的

本論文では、在日外国人支援における宗教組織の貢献について検討し、改めてその役割や存在意義を明らかにすることを目的とする。

3)方法

上記の目的のために、宗教性と利他的行動の関連、在日外国人支援における宗教組織の利他的行動に向けた動機と行動を先行研究から検討する。宗教性と利他的行動の関連については、まず「利他主義」という概念の意味内容や宗教性との関連を検討する。在日外国人支援における宗教組織の利他的行動に向けた動機と行動については、宗教の視点から見た外国人支援という点から、在日外国人支援における宗教組織・集団と宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団の利他主義をめぐる共通性や差異を重視していく。加えて、これらの支援活動がどのような動機から生み出されるのか、という視点で検討する。

4)研究対象

本論文で対象とする宗教については、キリスト教系組織に限定する。その上で、宗教性

と利他的行動の関連については、宗教と利他主義を主眼として検討してきた先行研究、在日外国人支援における宗教組織の利他的行動に向けた動機については実際に在日外国人支援に携わってきた宗教組織と利他主義および宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団と利他主義を主眼として検討してきた先行研究、行動については実際の在日外国人支援における各組織・集団の貢献を主眼として検討してきた先行研究を対象とする。

分析の対象とした文献は、和語文献については CiNii Articles のデータベースで以下のキーワード検索を用いて抽出し、特に在日外国人支援について論じられているものを選択した。

- (1)「宗教」及び「難民」 : 検索結果 29 本の論文から 2 本
- (2)「宗教」及び「ボランティア」 : 検索結果 69 本の論文から 5 本
- (3)「宗教」及び「利他」 : 検索結果 43 本の論文から 2 本
- (4)「宗教」及び「多文化共生」 : 検索結果 50 本の論文から 1 本
- (5)「宗教」及び「社会貢献」 : 検索結果 190 本の論文から 1 本
- (6)「教会」及び「コミュニティ」 : 検索結果 65 本の論文から 2 本

その他神奈川県大和市における難民支援について論じられたもの 1 本を、宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団による在日外国人支援の事例として選択した。加えて、キリスト教会の教育的役割について論じられたもの 1 本を、在日外国人支援におけるプロテスタント教会の貢献の事例として選択した。一般書籍については、特にキリスト教系宗教組織と社会貢献に関して論じられているもの 5 冊、利他主義に関して論じられているもの 1 冊を選択した。外国語文献については、Google Scholar のデータベースで「religion」、「volunteer」、「altruism」のキーワード検索を用いて抽出し、特に宗教と利他・ボランティアの関連性について論じているもの 5 本を選択した。なお、「宗教思想の影響を受けていない非宗教組織・集団」の在日外国人支援における貢献についても分析の対象としたいところではあるが、本論文では、宗教の視点から見た在日外国人支援を主眼としたいため、分析の対象とはしない。

2. 本論

1) 宗教と利他主義

小口・堀(1973)によれば、「宗教」という言葉の語義について以下の説明がされている。『宗』とは、仏教の根本原理を把握することによって到達する究極的な至高の境地をさす。この境地は、それ自体としては言説文字にはつくせぬ極致であるが、しかもなおこれを言葉によって表現しようとするところに『教』が出現する。すなわち、人びとを導いて『宗』までに到達させるために、相手に応じてさまざまな角度から述べられた言説が『教』である。したがって、宗教とは『宗と教』もしくは『宗の教』であり、この場合は要するに仏

教のことである。ところが日本では、のちにこの『宗教』が、仏教のみならず宗教一般をさす類概念として用いられるようになった」(小口・堀, 1973, pp.255-256)。この語義についての説明からは「宗教」とは、「宗」すなわち神そのものの教えであることが示されている。したがって、宗教を信じるということは、自己の欲望や囚われといった利己的な自分から脱出し、何らかの超越世界へ身を委ねることである。それはすなわち利己主義からの脱出を示し、対抗する原理としての利他主義、利他的行動の実践へと行き着くことになる。こうした宗教の精神性・霊性を信仰心の在り方から捉えようとする論点については、ここでは深くは立ち入らないが、宗教と利他主義の関連性を示す一つの発想として念頭に置きたい視点である。それゆえ、宗教組織や宗教思想の影響を受けた非宗教組織の活動をより深く検討する上では、まず「利他主義」という概念を枠組みとして取り上げないわけにいかない。人間が、どのように利他的行動に接近していくのか、「利他主義」に関わる先行研究の動向をもとに検討を行いたい。

利他主義に関する研究は欧米の宗教学や心理学、社会学等の分野において頻繁に議論され、先行研究も多く積み重ねられているテーマである。利他主義という言葉の英語 *altruism* は、利己主義 *egoism* の対概念として、社会学者コント(1798-1857)により造語された(稲場, 2011)。利他主義研究分野の創始者とされるソローキン(1889-1968)は、利他主義を個人が他人の幸福のために、自分の正当な利益をすすんで犠牲にし、自分の法律上の権利がそうする資格を有していても、他人を害することを止め、法律がそのような行為を要求しなくても、様々な方法で他人を助けることであるとした(吉野, 2017)。ソローキンの説明では“他人を助けること”という言葉が使われているが、これはいわゆるキリスト教における隣人愛⁵に示されるような実践的な利他主義について説明している。

これに対し、Vieten(2006)らは、人間の意識や精神的な面に注目し、精神的な面から導かれる利他主義に着目した。これに類似するものとしては、精神性と宗教が思いやりと利他主義に及ぼす影響を調査し、宗教性を超えた霊性は、利他主義の強化に関連していることを示した Laura(2013)らの研究がある。

Vieten(2006)らとは異なる観点であるが、Stephanie & Elizabeth(2007)は、前出のソローキンによる説明と同じ実践的な利他主義という観点で、ホロコースト時代のキリスト教徒によるユダヤ人救済の事例から利他主義について論じた。そこでは自分や家族へのリスクがあるにも関わらずユダヤ人を救済した人々を勇気ある利他主義者とし、その性格特性には勇敢さやポジティブさが見られること、またそれが悪や恐怖に直面した時に社会的な行動に繋がることを示されている。

このように、利他主義は主として宗教や人間の有する精神性・霊性といったものと関連付けられ、宗教的信念、思いやり、共感などが利他主義を構成し、他者への支援や利他的行動の動機となるという一定の捉え方が示されてきた。他方で、特定の宗教を信仰しない

無宗教の人々の宗教性に関する研究も行われ、無宗教の人々の宗教性についても、宗教と利他主義を考える上で見落とすことができない視点であるので触れておきたい。

特定の宗教を信仰しない人々の宗教心に着目した稲場(2011)は、「無自覚に漠然と抱く自己を超えたものとのつながりの感覚と、先祖、神仏、世間に対して持つおかげ様の念」を「無自覚の宗教性」と呼び、この無自覚の宗教性は、利他主義ともつながっていることを示した(稲場,2011,p.15)。さらに日本のボランティア活動に根差す宗教性全体について検討した山口(2017)は、無自覚の宗教性にもとづく、利他的行為を自己犠牲とは感じない人々の存在と機能に着目することの重要性を示した。

また非教団所属者のボランティア活動に対する、宗教性の諸次元の影響を検討した三谷(2014)は、特に共同体の中で文化的に共有された個人的な宗教性を「拡散的宗教性」と呼んだ。この拡散的宗教性は、先に述べた稲場のいう「無自覚の宗教性」との関連性を強く持つといえる。すなわち両者は共に、特定の宗教組織・集団に属さずとも、人間を超越したものへの祈りや「おかげ様の念」といった信念によってボランティア活動を行う人々の精神性を「宗教性」という言葉を用いて表しており、個々人は「無宗教」を自覚・公言していても、その「利他主義」の根源となるものが、人間に元来備わっている宗教性にある、とするものである。

では、先に述べた宗教組織・集団および宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団という相対化された集団・人々についての利他主義はどのように捉えられるだろうか。先行研究の動向をもとに、以下に検討を行った。

2)組織・集団と利他主義

(1)宗教組織・集団と利他主義

宗教的利他主義について論じた稲場(2015)は、宗教を信仰することと利他主義の関連について、信仰が信者の価値観や世界観を形成し、宗教の教義から導かれる利他主義がさらに信者の生き方を規定するとした。その上で、宗教の教えが利他的精神を涵養するということは、信者自身の信仰心が深く、また深い関与がある人ほど、利他性が強められることとなることを示した。

この「利他主義を説く宗教」には多くの宗教組織の教義や理念が該当し、宗教組織に属する人々は自ずと宗教に「深い関与がある人」と捉えられ、「利他性が強い」ことが分かる。そしてその宗教組織が利他主義の実践である社会貢献・ボランティア活動を行う背景や宗教性については、近年では、白波瀬(2018)が論じている。カトリック教会の移民支援について論じた白波瀬(2018)は、公会議において移民や難民に対しとくに配慮する必要性が指摘されたという歴史的事実を示し、カトリック教会が組織理念としての移民・難民との共生を掲げ、制度化された移民・難民の支援が可能となったことを示した。

ここで、キリスト教の宗派であるカトリックやプロテスタントが主な教義とする聖典、

すなわち聖書の教えがどのようなものであるか触れておきたい。ボランティア精神の根拠として共生意識及びその基盤としての宗教思想を論じた湊(2011)によれば、キリスト教系組織の利他活動・ボランティア精神の根拠ともなりうる具体的な聖書の箇所が以下のように引用されている。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない(ヨハネ 15:13)・・・自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ(マルコ 12:31)・・・帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝をもつようになる(マタイ 19:21、マルコ 10:21、ルカ 12:33、ルカ 22:20)・・・下着を二枚もっているものは、持たない者に分けてやりなさい。食物を持っている者も同様にしなさい(ルカ 3:11)」(湊, 2011, pp.32-34)。そして、キリスト教では他者のために自己の生存を投げ出すという行為が極めて当然のこととされ得ること、聖書が示す共生の姿は他者に対して利他的に努めることが如何に当然の使命かを訴えていることを示した。湊(2011)が述べるように、キリスト教徒にとって他者を助けるという行為は同然の行いであり、カトリックやプロテスタント教会が古くから移民・難民たちの支援に積極的に取り組んできたことは、一般的に支援活動というものは多くの障壁や困難を伴うことから、他者から称賛されるべき活動ともいえるだろう。しかし、宗教組織・信仰者にとってはその教義を信じ、忠実に従っただけであって当たり前のことをしてきたにすぎないということになる。宗教組織・信仰者が実践するこうした支援は、キリスト教における隣人愛の形ということができよう。さらにこの隣人愛については、一般倫理学の用語では利他主義と訳されるとの指摘がある(稲垣,2005)。このようなキリスト教の教義を忠実に守り、宗教的信念をもって他者への支援と向かう信者と宗教組織は「隣人愛」すなわち「利他」が自然と共有されており、「利他」の集まりそのものといえるのではないだろうか。

さらに宗教とボランティア行動に関する研究は、欧米諸国の宗教社会学⁶においては頻繁に注目されるテーマであり、多くの先行研究が行われている。それはおそらく、日本ではなじみの薄い宗教を信じることが、世界では日常的なテーマであるためであろう。また西洋文明がキリスト教などの宗教を文化的伝統とし、そこから導かれる利他主義を文化的土台とする素地があるからではないだろうか。

最近では、Becker & Dhingra (2001)、Einolf (2011)らが論じている。Becker & Dhingra (2001)は、宗教的信念とボランティア行動の関係について、ニューヨーク州のある特定の地域住民、キリスト教会の牧師へのアンケート及びインタビュー調査を行い、自分が属する宗教コミュニティネットワークがボランティア行動へ導く要因となっていることや、教会という宗教コミュニティを中心とした友人や家族の強いつながりが重要視され、ボランティア行動の動機となっていることを示している。

Einolf (2011)らは、アメリカの中年を対象に、宗教的価値観・信念がどのように社会貢献活動への動機付けとなるかを調査し、宗教的信念を持つ人々それぞれがボランティア・社

会貢献活動自体を自分自身に対する「宗教的アイデンティ」、「宗教的道德」、「人生の使命」などと捉え、実際の行動に結び付いていることを示した。

このように Becker & Dhingra (2001)や Einolf (2011)らが行った調査からは、ボランティア行動・社会貢献活動が、宗教的アイデンティティを大切にする信仰者たちの人生にとって重要なテーマである、ということが明らかにされている。それはすなわち、人々の宗教性が利他的行動への強い動機となる、ということになる。

(2)宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団と利他主義

文化庁(2021)の宗教統計調査によれば、日本におけるキリスト教人口は1%とされる。しかしながら、キリスト教思想の影響を受けた非宗教組織や、その他の宗教思想の影響を受けた非宗教組織によるボランティア活動は、日本でも多くみられ、数は限られているものの先行研究も見受けられる(藤代, 2017; 志賀, 2016など)。ただこの宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団については、前出の三谷(2014)の論じる「拡散的宗教性」や稲場のいう「無自覚の宗教性」を有しているとは言い切れず、宗教思想の影響をある程度受けつつも、特定の宗教組織や教団には属さず一定の距離を持っている。

したがって、「宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団」は、「集合的宗教性」を有するものでもなく、さらに別の次元での宗教性などを有している可能性も持つ。この「別の次元」というものを明らかにする手がかりとなるものが、宗教組織・集団や無宗教者とも共通する「利他主義」を創り出す精神性ではないだろうか。宗教組織・集団の人々のボランティア行動の動機が「集合的宗教性」や「宗教的利他主義」であり、無宗教とされる人々の動機は「無自覚の宗教性・拡散的宗教性に基づく利他主義」であれば、これらのいずれでもない宗教思想の影響を受けた非宗教組織の人々の動機は、「人間の域を超えるものに対する畏敬の念のようなものを感じ、それに対して自らの宗教的信念や正義感を有し、さらにそれらを根拠として助けを必要としている現場へ、自分の意志により向かう」といった意味内容を帯びてくる。それは曖昧な「準宗教的利他主義」といえるかもしれない。ただし「宗教的教義にあるから」、「神の教えであるから助ける」とか、あるいは信念などはないがただ「困っている人がいるから助ける」、という単純で一義的な動機ではないということはいえるだろう。

3)組織・集団による支援と利他主義

本節では、前節で示された宗教と利他主義の関連性を踏まえ、キリスト教系組織を対象として実際の組織・集団の在日外国人支援を中心とした社会貢献活動に着目する。

(1)宗教組織・集団による支援と利他主義

①カトリック教会の貢献

カトリックの移民・難民等の外国人支援については、カトリックの世界的組織の枠組みを強みとする体系的な支援が伝統的に実施されてきた。世界的な宗教組織であるカトリッ

ク教会は、移民や難民支援に対する基本的態度を指針として持ち、古くから積極的に移民・難民支援に取り組んできている。その基本的態度は、カトリックが聖典とする聖書やキリスト教の教えから導かれるものである。

カトリック教会の実例では、近年では、高橋(2015)、白波瀬(2018)が論じている。高橋(2015)は、カトリックによるインドシナ難民支援事業を事例として宗教関連組織のカトリック教会が果たしてきた役割を紹介し、カトリック教会が難民と地域社会の結節点となって日本での定住化のプロセスを支えてきたことを示した。インドシナ難民問題とは、1975年のベトナム戦争の終結をきっかけとした政変による弾圧を恐れてベトナム・ラオス・カンボジアのインドシナ三国から国外へと逃れた人々をめぐる難民問題である。さらに、今後の課題として「研究対象を特定の移民集団や宗教組織に限定せずに、行政、他の宗教、他の地域住民などにも目を配って諸アクター⁷を複眼的に調査することにより、現代日本における宗教を通じた移民たちとの『多文化共生』の実態に迫る必要」を示している(高橋, 2015, p.81)。この課題において触れられている「諸アクター」が、本稿における「非教団」であり非宗教組織である。そして高橋(2015)は戦後日本の歴史を振り返り、行政や社会福祉の現場での在日外国人支援では、ある一定の時期において日本が受け入れていた難民の3分の1以上がカトリック関連の施設に収容されていたことを示した。

高橋(2015)が述べているように、カトリックなどの宗教は、第一義には移民・難民の異国での生活上の衣食住の支援を活動の中心とする。他方で、支援者となる宗教組織が、移民たちが母国で信仰していた同じ宗教であれば、日本人を含めた信仰者同士のネットワークの形成や、礼拝堂を移民同士のコミュニティセンターとして提供することが可能となる。またインドシナ難民の中には少数派ながらカトリックを信仰する国民もおり、日本でのカトリックによるインドシナ難民支援が、同じ宗教を信仰している組織からの支援であるという安心感を、カトリック信者の難民たちが感じたことは想像に難くない。高橋(2015)が述べた「宗教の社会的役割」の一つとして、信仰という面で移民・難民たちを精神的に支援することが挙げられる。それはその民族の深い理解、すなわち民族固有の宗教まで理解しようとするものであり、単に衣食住の提供を行うという形だけにとどまらない、宗教組織に与えられた在日外国人支援における重要な役割である。

また白波瀬(2018)は、カトリック教会を代表とする宗教組織が多文化共生社会の担い手として成熟していくために、「移民支援を目的とするアソシエーション⁸を宗教法人以外の法人格で結成すること」を提案し、「宗教組織を土台としつつ宗教組織とは異なるアソシエーションを併設させることで、性質の異なるソーシャルキャピタル⁹を同時に形成することができる」というメリットが述べられている(白波瀬, 2018, p.40)。この提案によるアソシエーションは、「(ある)宗教組織を土台とする」という点で、どこかの「教団」が元締めとして存在することになり、「非教団」である非宗教組織とは異なるものと考えられる。

②プロテスタント教会の貢献

プロテスタント教会においてもその聖典はカトリック教会と同じ聖書であり、教義や聖書の教えから、困難にある他者を支援するという隣人愛は、キリスト教徒が人生において神から課された「振る舞い」であり、「行い」とされる。プロテスタント教会の在日外国人支援における貢献の事例では、近年では、荻(2018)、李(2012)が論じている。荻(2018)は、大阪市の在日コリアン集住地域を事例に、高齢化する在日韓国人・在日朝鮮人へのプロテスタント教会の支援が信仰の有無や国籍に関係なく、教会の近隣で暮らす人々も対象として地域社会に向けた福祉活動として発展してきたことを示した。ここで示されているプロテスタント教会の活動は、福祉活動の対象者に対して直接的な伝道(布教)をしていないことを挙げ、宗教組織がベースとなる社会的な活動が一般の人々に受け入れられやすくする工夫が見られていることを示した。

荻(2018)とは異なり、宗教活動¹⁰に力を入れている例として韓国系プロテスタント教会を取り上げた李(2012)は、その教勢を日本国内の教会数及び信者数によって示した。実際に日本国内における韓国系プロテスタント教会は100を超え、多様な教団・教派が存在する。宗教活動に力を入れた結果、教会は在日韓国人が定期的に通う場となり、様々な情報を交換するコミュニティセンターとしての役割を担っていることを示した。

また藤代(2017)は実際に関東にあるプロテスタント教会に通い、外国人信者へのインタビュー調査を通じて、宗教施設が在日外国人にとって結節点となり、情報の交換とアイデンティティ確認の場となっていることを示した。藤代(2017)によるインタビュー調査は、調査対象となったプロテスタント教会に定期的に通う在日外国人を対象に行われ、1990年以降に移住してきた日系人とその配偶者等の家族が多かったことや、滞在が20年以上になる者も少なくなく、母国でも敬虔なクリスチャンで来日後も熱心に宗教を信仰し続ける者もいれば、来日後に教会に通うようになった者もいたことが示されている。そしてこのプロテスタント教会が現在も多言語での礼拝が実施され、礼拝後には交流会も持たれていることを紹介し、教会が情報拠点としての役割や家族ぐるみで交流できる場所としての役割を果たしていることを示した。さらにこれらのことから教会が在日外国人にとって情報収集の場、安心できる場としてコミュニティセンターとしての役割を担っているとし、国際交流協会や行政の相談窓口に行かずとも生活を送ることが可能となっていると指摘している。

このようにプロテスタント系では、韓国系プロテスタント教会(李,2012)、日系ブラジル人教会(星野,2018)、フィリピン系エスニック教会(三浦,2012)などを扱った先行研究が見られ、いわゆるニューカマーと呼ばれる在日外国人が、情報交換の場として、また自らのアイデンティティを確認する場として、それぞれの目的を持ち教会を利用していることが示されている。これらの先行研究から、プロテスタント教会はカトリックのように宗

教組織として移民・難民への支援を体系的に実施するという形態ではなく、それぞれの教会が単独で、その地域に住み教会に通う在日外国人の生活上の相談の場として、また在日外国人自らが新たなニューカマーの同胞に対して情報交換の場や、あらゆる支援を互いに提供するという形態が中心となっていることが導き出される。

以上のとおり、カトリック教会やプロテスタント教会などの宗教組織について、在日外国人に関わる諸問題に関する支援の実例やその役割を扱った研究では、宗教組織の貢献やその施設を利用したコミュニティセンターとしての役割が論じられてきた。キリスト教系宗教組織では、支援活動を教義上の「奉仕」として、信徒の義務を果たす目的で、半ば仕事に近いような感覚も持ち合わせつつ、外国人支援などのボランティア行為に自然に結び付いているという見方もできる。そして注目すべきは、これらの宗教施設が、移住する前から日本人信者によって建設されたものだけではなく、在日外国人自らがコミュニティの場を設置する目的で、施設の建設に至っているケースもあることである。この実態から、それだけ宗教施設が、異国での生活を送る在日外国人にとって重要な役割を果たしているということが明らかになる。

(2)宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団による支援と利他主義

宗教組織・集団と比較すると、宗教思想の影響を受けている非宗教組織について移民・難民支援を含めた社会活動の事例を扱った先行研究は多くは見られない。宗教参加と社会活動の関係性について日本全国のデータを用いて分析した寺沢(2012)は、日本のボランティア、社会活動における宗教の位置づけについて、宗教と社会活動に関するこれまでの実証研究について、個別教団や宗教者主体の社会活動についての事例研究は行われているが、個人を論じた研究は少ないと指摘する。それはおそらく、実際に個人ボランティアに接近したり宗教思想の影響を受けている非宗教組織の存在自体を把握したりする困難性が影響して、研究対象として認識されにくい、というような事情があるためと考えられる。そのため、個別に移民・難民支援の事例を調査する中で記録が残されているもの、という視点で事例を発掘していく方法が主となる。さらに、在日外国人支援問題という解決困難性の高い社会問題に対して、行政や宗教組織以外で独自の支援や働きかけが可能であって、かつ宗教思想の影響を受けた非宗教組織という対象グループ自体が希少である可能性もある。

このような中、宗教思想の影響を受けた非宗教組織の活躍については、藤代(2017)は1970年代から日本で始まったインドシナ難民支援事業に携わった主婦ボランティアや主婦の組織グループの存在について触れている。藤代(2017)で言及されている主婦ボランティアや主婦の組織グループについては、インドシナ難民の受け入れ先であった大和定住促進センターでの活動が関連する諸種の歴史的史料から確認されている¹¹。この主婦ボランティアや主婦の組織グループは、カトリック信者の主婦が集まったボランティアグルー

プ、キリスト教思想の影響を受けた婦人団体であった。このうちカトリック信者の主婦ボランティアはカトリック教会という宗教組織から形成されたものであり、宗教組織・集団の一つと考えられる。一方で、キリスト教思想の影響を受けた婦人団体について調査したところ、特定の宗教組織・集団には属していない団体でありつつも、通常の活動内容・理念にはキリスト教思想が強く影響していることが明らかになった¹²。このことから、キリスト教思想の影響を受けた婦人団体は、宗教組織・集団とは区別して、「宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団」と捉えることができる。藤代(2017)においてはこの主婦の組織グループについてのインドシナ難民支援活動の事実を述べるに留められ、活動や存在の意義について実証的に論じられたものではないが、宗教思想の影響を受けた非宗教組織が行った在日外国人支援の事例として触れている点で、数少ない貴重な先行研究である。

3. 結論

以上のとおり、先行研究の動向の検討から以下のことが明らかになった。キリスト教系宗教組織の在日外国人支援における貢献については、時代背景や社会情勢に沿い、各組織・集団の宗教的信念に基づいて最善の支援を目指して取り組んできたことが明らかになった。さらに、在日外国人支援をはじめとする宗教組織の利他的行動に向けた動機は、信者個人の宗教的アイデンティ、宗教的道德、宗教コミュニティネットワークなどが社会貢献活動の強い動機となっていることが明らかになった。この結果は、他者への支援に対する利他の役割は、宗教を信仰する人々がそれぞれ信徒としての在り方や信仰を自問し、こうした信者の信仰を礎にした利他の心を動機とする宗教組織が行う支援そのものであることを示している。

また宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団については、実際にどのような宗教性を有し、利他的行動へと向かうのかという点で実証的研究がなく、明らかにされなかった。そこで今後は、宗教思想の影響を受けた非宗教組織・集団に属する人々からの実際の活動についての聴き取りなどを通じて、その活動への動機などを調査することが必要であろう。

また日本初の国家プロジェクトであったインドシナ難民支援事業においては、カトリック教会が大きな役割を果たしたことが明らかになった。加えて、インドシナ難民支援事業においては、国家プロジェクトとなる以前から難民の一時滞在施設の提供やカトリック教会信者によるボランティア活動が展開されており、行政の支援に先立って、大きな貢献を果たしたことが明らかになった。このような事例からも、難民・移民問題を考える上で、宗教組織は今後も見落とすことのできない存在であるといえる。本論文では、キリスト教系組織を対象を絞ったが、その他の宗教組織についてもインドシナ難民支援事業をはじめ難民・移民への支援活動は幅広く展開されている。ただし、インドシナ難民支援事業においては、宗教組織のみならず、非宗教組織の活躍があったことも触れておきたい。例えば、

非宗教組織「日本国際ボランティアセンター(JCV)」はインドシナ難民が国際的問題となった際にタイの難民キャンプに集まった日本人によって設立され、同じ人間として人々の暮らしや命を守りたい、という助け合いの精神をポリシーに¹³、大きな貢献を果たしてきた。さらに近年では、宗派を超えた仏教僧侶による仏教の精神に基づく国際協力NGO「アーユス仏教国際ネットワーク」が在日外国人・難民支援を行う非宗教組織への助成事業や、在日外国人・難民支援問題に関する情報発信・啓発活動を行っているといった事例もある¹⁴。こうした仏教系組織による、非宗教組織を通じた支援の意義についても今後の検討課題としていきたい。

宗教の視点からみた在日外国人問題は、日本人にとってはなじみの薄い視点であるかもしれない。しかし、世界的には、人々は何らかの宗教を信仰していることが日常であり、宗教組織や施設での礼拝実践は日常的なテーマである。したがって、衣食住の支援に加え、宗教・精神面でのケアを提供することができる宗教組織・集団は、他の組織には担うことのできない役割を果たす重要な存在であるといえることができる。在日外国人にとって宗教を信じるということは、かれらが異国において母文化を失わず生活を送り、民族的・宗教的アイデンティティを維持すること、伝統文化・信仰を継承することそのものだからである。この視点に立てば、在日外国人問題を考える上での民族理解とは、その民族固有の宗教についても理解することであると言えよう。民族理解の一助となり、継続的に在日外国人の宗教・精神的な支援を提供する役割を担っている宗教組織は、これまでの移民・難民支援の歴史における存在意義を超えて、より価値のある存在であるといえることができる。

繰り返しになるが、今後も在日外国人問題を考える際には、衣食住や仕事などの提供にとどまらず、宗教の視点から在日外国人問題を捉え、具体的支援策を探ることが必要であろう。それにより、外国人理解・在日外国人支援の質が深まることが期待される。

引用文献

- Becker, P. E. & Dhingra, P. H.(2001). *Religious Involvement and Volunteering: Implications for Civil Society*: Sociology of Religion 2001, 62:3 315-335
- 文化庁(2021). 令和2年度宗教統計調査の主な結果 Retrieved from https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/index.html (2021年10月11日)
- Comte,A.(1844). *Discours sur l'esprit positif*. (オーギュスト・コント 田辺寿利(翻訳)(1938). 実証的精神論 岩波書店)
- Einolf, C. J.(2011). *The Link Between Religion and Helping Others: The Role of Values, Ideas, and Language*. Sociology of Religion 2011, 72:4 435-455
- Fagin-Jones, S. & Midlarsky, E.(2007). *Courageous altruism: Personal and situational correlates of rescue during the Holocaust*. The Journal of Positive Psychology 2007, 2(2), 136-147

- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘 (1977). 社会学小辞典 増補版 有斐閣
- 星野英紀・池上良正・氣多雅子・島菌進・鶴岡賀雄編著(2010). 宗教学事典 丸善出版
- 星野壮 (2018). カトリック教会による宗教組織内<多文化共生>を目指す試み 高橋典史・白波瀬達也・星野壮・岡井宏文・荻翔一・徳田剛・永田貴聖・野上恵美・山本崇記(編著) 現代日本の宗教と多文化共生：移民と地域社会の関係性を探る 明石書店
- 法務省 (2021). 用語の解説 Retrieved from <https://www.moj.go.jp/isa/content/001342798.pdf> (2021年12月17日)
- 藤代将人(2017). 大和市 M 地区にから見る神奈川県県央地域のエスノサバーブとしての一位相：結節点の社会的世界と地域のエスニシティ経験に照準して 専修人間科学論集 社会学篇, 第7巻, 125-137
- 飯野正子(2002). B.C.州の仏教会と日系カナダ人コミュニティ アメリカ太平洋研究 第2巻,45-61
- 稲場圭信(2011). 無自覚の宗教性とソーシャルキャピタル 宗教と社会貢献, 1(1)3-26
- 稲場圭信(2015). 宗教的利他主義 未来共生学, 第2号, 13-28
- 稲垣久和(2005). 福祉のキリスト教哲学序論 キリストと世界 東京基督教大学紀要, 第15,1-18
- 小泉浩一(2019). インドシナ難民に対するわが国の対応と公的及び民間支援の実際：1970年代から1990年代の変遷を中心に 敬心・研究ジャーナル 第3巻,第2号,92頁
- 小口偉一・堀一郎監修(1973). 宗教学辞典 東京大学出版会
- 湊道子(2011). ボランティア精神と宗教思想：ボランティア教育への提言 実践女子短期大学紀要,第31号,25-47
- 三谷はるよ(2014). 日本人の宗教性とボランティア行動：非教団所属者における拡散的宗教性の影響 ソシオロジ, 58(3)ソシオロジ編集委員会・社会学研究会
- 三浦綾希子(2012). フィリピン系エスニック教会の教育的役割：世代によるニーズの差異に注目して 教育社会学研究, 第90巻, 191-212
- 荻翔一(2018). 高齢化問題に取り組む韓国系キリスト教会：大阪市・在日コリアン集住地域を事例に 高橋典史・白波瀬達也・星野壮・岡井宏文・荻翔一・徳田剛・永田貴聖・野上恵美・山本崇記(編著) 現代日本の宗教と多文化共生：移民と地域社会の関係性を探る 明石書店
- 李賢京(2012). 韓国系ニューカマーのキリスト教会 三木英・櫻井義秀(編著) 日本に生きる移民たちの宗教生活：ニューカマーのもたらす宗教多元化 ミネルヴァ書房
- Saslow, L. R., John, O. P., Piff, P. K., Willer, R., Wong, E., Impett, E. A., ... Saturn, S. R.(2013). *The Social Significance of Spirituality: New Perspectives on the Compassion-Altruism*

Relationship. Psychology of religion and spirituality, 5(3), 201-218

志賀浄邦(2016). 台湾仏教・慈濟会による慈善活動とその思想的基盤：菩薩行としてのボランティア活動と「人間仏教」の系譜 京都産業大学日本文化研究所紀要 第21号,196-251

白波瀬達也(2018). カトリックにおける重層的な移民支援 高橋典史・白波瀬達也・星野壮・岡井宏文・荻翔一・徳田剛・永田貴聖・野上恵美・山本崇記（編著）現代日本の宗教と多文化共生：移民と地域社会の関係性を探る 明石書店

Sorokin,P.A.(1948).*The reconstruction of humanity*. *Philosophical Review* 59 (1):115-123

高橋典史(2014). 宗教組織によるインドシナ難民支援事業の展開：立正佼成会を事例に 宗教と社会貢献, 第4巻, 第1号, 1-25 「宗教と社会貢献」研究会

高橋典史(2015). 現代日本の「多文化共生」と宗教：今後に向けた研究動向の検討 東洋大学社会学紀要, 第52巻, 第2号, 73-85

特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワークホームページ Retrieved from <http://ngo-ayus.jp/about/outline/> (2022年2月14日)

寺沢重法(2012). 宗教参加と社会活動 現代社会学研究, 第25巻, 55-72

Vieten, C., Amorok, T., & Schlitz, M. M. (2006). *I to we: The role of consciousness transformation in compassion and altruism*. *Zygon*, vol. 41, no. 4

山口洋典(2017). 無自覚の宗教性をもとにしたボランティア活動の台頭：宗教とボランティアの20年 ボランティア学研究, 第17号, 23-30

山本剛郎(1992). フレーザーバレー地域における日本人コミュニティの形成・発展過程 キリスト教社会問題研究 同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会 第41号,104-130

吉野浩司(2017). アメリカ社会学会における利他主義セクションの可能性：P.A.ソローキンの統合主義社会学の視点が投げかけるもの 現代社会学部紀要, 15巻1号, 23-32

財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部(1998).大和定住促進センター 18年誌：インドシナ難民の日本定住支援センターの軌跡 財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部

¹出入国在留管理庁ホームページ(2021). 令和2年6月末における在留外国人数について Retrieved from https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00018.html (2021年10月5日)

² 法務省統計で調査の対象となる中長期在留者及び特別永住者とされる在留外国人。

³ ここでいう「非教団」とは、特定の宗教組織や教団には属していないが、何らかの宗教思想の影響を受けた人々の集まりを示す。

⁴ 宗教を信じること。すなわち、自己の欲望や囚われ（利己主義）から脱することであり、自我の限界を悟って何らかの超越世界に身を委ねること。

⁵ キリスト教で、他者への愛。聖書では、隣人愛に関する教義が多数記されている。

⁶ 社会現象としての宗教を研究する社会科学の一分野。宗教社会学では、自然現象とは異なり、宗教を人間と人間との相互作用から生まれる社会現象として捉える。

-
- 7 国、自治体、事業者、任意団体など行為主体をさす。
 - 8 特定の類似した関心や目的をもつ人びとが、それらを達成するために意識的に結合し形成する自由な人為的集団のこと。結社(ときには機能集団、派生集団)と訳されることがある。
 - 9 社会・地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念。
 - 10 礼拝会堂建設、大規模集会開催、路傍伝道などが挙げられる。
 - 11 アジア福祉教育財団難民事業本部の記録による。
 - 12 この婦人団体は全国友の会相模友の会であり、創設者の羽仁もと子がキリスト教徒であったことから、キリスト教の精神に基づく活動を行っている。
 - 13 日本国際ボランティアセンターホームページ(2022)。Retrieved from <https://www.ngo-jvc.net/jp/challenge/policy/codeofconduct.html> (2022年2月12日)
 - 14 1993年設立の認定NPO法人で貧困や不公正、環境問題など平和と人権に関わる問題へ足元から解決を目指す活動を行っている。

Research paper

Contributions of religious organizations that support foreign residents in Japan

Izumi Takahashi

(Graduate School of Education, Seisa University)

Abstract

This study aims to clarify how religious organizations support of foreigners living in Japan. We will examine previous studies that explore the relationship between religiousness and altruistic behavior, mainly in Christian organizations, and the motives and behaviors based on altruistic behaviors of religious organizations and groups that support foreigners living in Japan.

The results of our survey show that the motivations and actions of religious organizations, based on altruistic behavior, are more than just providing support in the form of food, clothing, and shelter; they also provide support to foreigners living in foreign countries.

This result shows that religious organizations are significant as they provide religious and mental care to foreigners in foreign countries. Further, it shows that these supports systems are important to foreigners, whose religious organizations often base their identity on their faith. These organizations, therefore, fill a role that other organizations cannot play. The role of altruism in these support systems is the support provided by religious organizations motivated by altruism based on the beliefs of their believers.

Keywords: support for foreigners living in Japan, religious organizations, altruism, religiousness, volunteering